

巻 頭 言

雑誌「数学」前編集委員長・東京工業大学理学院数学系

田口 雄一郎

雑誌「数学」の編集委員長を二年間務めさせて頂きました。任期中は他の仕事との兼ね合ひもあつて私自身の関わり方としては自転車操業的になつてしまひ、精神的な余裕が無かつたのですが、今頃になつて「数学」とは何ぞや？ みたいな事を考へたりしてゐます。この雑誌の特長は何と言つても「日本語による」「概説的な論文を主とする」点にあります。日本数学会のホームページに「論説は、専門外の人々にも楽しめ、理解できることを目的にした解説記事として書かれており」云々とあるのが、「論説」のみならず、雑誌「数学」全般の面目をよく表してゐると思ひます。然し乍ら「専門外の人々にも楽しめる」といふ理想を実現するのは容易ではなく、口頭発表版の「談話会」等もさうですが、執筆者の方々の最も苦勞される所だらうと思ひます。これら「概説」と「日本語」（一般に、特定の言語）といふ特性が特に重要となる時代や場所がある様な気が致します。よい例として『文明論之概略』が思ひ出されます。福澤諭吉は西洋の思想を取り入れるために貪欲に洋書を翻訳して行きましたが、或る時点でそれでは埒が明かないと思ひ至り、「文明一節ずつの切売」（＝個々の著作の翻訳）ではなく、自己流に消化した上で「概説」としてこの書を著しました。数学はその読み書きの難易度が言語の如何に依存する所の比較的少ない学問かとは思ひますが、それでも私程度の語学力だと、日本語の方が余程取り付き易く読み易い、そしてそれは専門から遠いテーマに関する概説的な文章であつて技術的な要素が少なければ少ないほど猶更さうである、と感じます。今後少子化が進んで社会全体が縮小を余儀なくされると、数学者社会もその例外たるを免れ得ず、各分野の専門家の数も減り、対応して一人当たりの守備範囲が増へ、さうなると消化吸收のよい概説論文の有用性は益々増すのではないでせうか。

等々と漫然と思つてゐた折柄、ふと思ひ立つて、以前から行つてみなければと思つてゐた丸木美術館に行つて参りました。勿論「原爆の図」を観るためですが、その時偶々常設展の他に、と或る現代アート作家の特別展を開催してをり、しかも彼ら（夫婦でユニットを組んで活動してゐる）のトークイベントの開催日にも当たつてゐました。もともと興味があつた訳ではなく聴くつもりもなかつたのですが、何故かフラフラと入つてしまひました。さうしたらこれが思ひの外面白く示唆的でした。曰く、「作品といふのは誰かが再発見しない限りゴミだ」と。彼らはこれまでも、その時々社会問題や自然災害に触発されて、録音や映像も駆使し、時には自らのパフォーマンスをもその一部に取り込んだ作品を

発表して来たのですが、彼らの昔の作品を研究してゐる研究者や学芸員が、作品の素材となつたテープ等を発掘したり整理したりしてゐて、その過程で色々と再発見する、そのお蔭で作者としても再発見があり何十年も後に再び作品として世に問ふ事が出来る、観る側に於いても、新しい世代にも鑑賞可能となる、といふ様なお話でした。さう言へば、「マタイ受難曲」でさへメンデルスゾーンによる「再発見」のお蔭で今に伝えられてゐるのでした。「数学」の記事として採り上げられるべきテーマは編集委員によつて或る意味「再発見」されて推薦され、他の編集委員の支持も得た後に執筆依頼されます。数学の研究成果の場合は（現代アートと違つて）その様なプロセスを経なくても「ゴミになつてしまふ」といふ危険は少ないとは思ひますが、概説論文となる事により、より広い範囲の人々の目に触れる事になる訳で、そこに第三者による「再発見」が介在してゐるといふ所が似てゐると思ひました。「数学」は編集委員による「再発見」や読者による「再発見」の機会を提供してくれるプラットフォームになつてゐると言へさうです（とは言へ、雑誌「数学」で「再発見」し切れない重要な仕事も沢山あるであらう事は心に留めておかねばなりません）。「再発見」を「評価」と読み換へれば、深谷賢治氏の「正しく研究を評価するという事は、共同体としての研究者集団（たとえば数学者全体）の果たしているもっとも重要な機能である」（『数学者の視点』）といふ言葉にも意を強くするものがあります。

また、「主張するよりも、先ずは記憶しよう、忘れないでおかう」「痛みを記憶し続けよう、アートの原点はそこではないか」とも言つてみました。戦争被害 / 加害等は勿論ですが、自然災害であつても人災的要素の大きい場合もあり、さうすると「責任」について主張をしたくなるのは当然な訳ですが、それはともかく「先ずは …」といふ事かと思ひました。「日本人は忘れるのが得意だ（それが悪い事ばかりではないが）」とも言つてみました。或る高名な数学者が「数学に於いても歴史的な文脈を踏まへて仕事をする事が重要である」と強調してをられたのを思ひ出しました。アーティストの言ふ「記憶しておく」といふのには、その様な、刹那的でない仕事の仕方を心掛ける、といふ意味合ひもあるのかもしれない。言ふまでもなく数学の雑誌には記録媒体としての機能がありますが、中でも「数学」は数学的内容を非常に圧縮した形で保存してをり、物理的にも比較的薄い冊子体（各号は厳密に 112 ページ！）として存在してゐますから、長期間に亘つて「記憶しておく」ための媒体として極めて優れてゐるのではないでせうか。にも拘はらず、私自身は福岡から東京に引越す際に古い「数学」を大量に廃棄してしまつた事が今となつては大変に悔やまれます。

「原爆の凶」を契機に、多少飛躍した analogy between math and art を辿つてみましたが、たまにはかうして専門外の方の話をお聞きしたりしてあれこれ思ひを巡らすのも楽しいものです。